

食の一面

コンサルタント Info Box 津田謙二

問題提起あり

日本 SPF 豚協会創立 30 周年の記念フォーラムが横浜で行われ、国立歴史民族博物館館長の佐原真先生と筆者が記念講演を行った後、会場を変えての SPF 豚フェスタの立食パーティの席上で、ある畜産関係者が筆者に語りかけてこられた。

いろいろな会話の中でその方がおっしゃる。

「私たちはブタを飼うとともに、飼育したブタを殺すのも仕事なのです……」

筆者は一瞬絶句した。言われてみれば、ではなく、言われるまでもなく、これが現実なのだ。いかになりわいとは言え、現に餌を与え、健やかな生育を喜び、病気になるよう心配りを欠かせない。それでいて成長した時には人間の食料にしなければならぬ。

重い言葉である。そしてこのことは、避けようとしても避けることのできぬ現実なのだ。

筆者は考え考え申し上げた。

「生命を奪う、それがお仕事、そのとおりです。でも、私たちはご飯をいただくその時に、たった一口の中に何十粒、何百粒のお米それぞれの生命を奪っている。これが、私たちが“生きる”ということの現実なのではないでしょうか。となると、私たちの生命のために死んでもらった米、野菜、魚、そしてブタたちの生命を無駄にしないためにも、心から感謝して、おいしく残さずに食べる。そのように加工し調理することがなにより大切なのではないのでしょうか……」ところどころ詰まり

ながら、半ば吐き出すように申し上げたのが以上の言葉だった。

畜産関係者の誰もが心に留め、忘れようとしても忘れ去ることのできぬ現実 至極当然のこととは言いながら、重い問題提起であった。

その昔、生産手段と消費手段が密着し、またはごく近いところで行われていた時には、人々は、自分たちが生きるためには他の生命を奪わなくてはならぬことを日常生活の中で実感していたに違いない。

NHKの“食のルーツ・5万キロの旅”シリーズの映像の中にも、欧州のとある田舎で、昨日までかわいがっていたブタが解体され、家中総出で余すところなく利用されていく、腸は洗ってソーセージにされていく……この一部始終を幼い子どもがじーっと見つめているシーンが興味深かった。生きることの、家畜と人間との厳しい関係を真正面から見据え、目をそらさぬ取材ぶりには得も言われぬ感動と共感を覚えたものである。

生き物は、特に動物は、生きるためには何かを食べねばならぬ。それも有機物を、つまり植物か動物を食べねば生きていけぬ。ヘビがカエルを呑むと言うが、その呑まれるカエルだって虫を食べている。これが“生きる”ということの現実なのだ。

生命を見つめる

この日の問題提起はしばらくの間筆者の頭から

離れなかった。いつしか“生命を見つめる”との視点で物事を見、考える癖がついてしまっていた。

早い話が“死”である。人間誰しも死ぬ、いつかは死ぬ。それもいつ死ぬかわからぬ。明日死ぬ可能性だってあるのだ。人によっては、食肉家畜のブタよりもはかなく思いがけず死を迎えることもある。だから保険会社が存在する……とまで言うのは言い過ぎかもしれぬが、これもまた現実なのだ。

昔は平均寿命も短かったし、疫痢などによる幼児の死亡率も高かった。多くの人が自宅で死を迎えた。人々は子どものころから遺体を目のあたりに見て育ってきた。誰もが、もちろん自分もいずれはあのような姿になる……誰に言われなくても子どもであっても、この現実から目を背けることがなかった。考えてみればこれは得難い人生教育の場、でもあった。今では死は病院か事故現場、日常生活から離れてしまっている。時には目を背けようとする。

以前、ある葬儀で、火葬場での最後の対面の時、親族の20歳ぐらいのお嬢さんがヒーッと悲鳴をあげ遺体に近づくのを拒絶したのを見た。遺体、つまり死体がこわいのだ。日常生活から“死”というものが縁遠くなっていることを痛感させられるとともに、このお嬢さんは“生きる”ことの意義について考える機会を持たぬまま大人になったのではないか、と思ったものである。

この“死”について今ひとつ述べておこう。飼っていたペットが死んで、子どもが悲しむ。遺体を前にして“悲しむ”そのことが何よりも大切な人生教育であるはずなのに、それをかわいそうと思ひ、すぐに次のペットを買い与える親がいるという。子どもは生命の尊さ、死に別れを味わう暇も

なく次のペットに夢中になる。いったいどんな神経なのですかね、とペット店の主人が怒り、あきれている。「私たち、売ればそれでよい、そんなものではありませんよ」とおっしゃる。

左様、テレビの画面ではやたらに人殺しや死体が登場するが、実感、肌で感じる死とは縁遠くなっているのが現代の社会なのだ。食料品売場は少し視点を変えれば、動植物の遺体によって埋め尽くされているとも言える。時には原形をとどめぬが故に“おいしそうに”加工されているものも、である。そこでは魚も肉もがとにかくお金を出しさえすれば手に入るもの、ぐらいいい感じの感覚でしか受け取られていない。目の前に厳然とした“死”が存在するのにあえて気付こうとしていない。

これはやはりおかしいのではないか。生産と消費の場がまるで離れてしまった結果、われわれ人間が動物や植物の生命を奪って生きている、それらの死によって生かしてもらっている、というごく当たり前の発想が、いつしか希薄になっていつてしまっているのではあるまいか。

食物連鎖

話は少し本質論に近づきすぎた。

動物と名がつくもののほとんどは、何らかの生命の宿るもの、またはその残渣を食べねば生きていけぬとは前にも述べた。いや植物でも時には有機物の形で養分を吸収する。食虫植物も存在する。その一方で動物は死ぬと、最終的には細菌などで分解され土に還っていく。水中や海中でも似たような形で食物連鎖が繰り返される。これが“自然”の姿なのだ。

ここで少し脱線する。中国では(沖縄でも)人間の排泄物はブタの餌となっていた。トイレはブ

夕飼育の場に設けられている例が多かった。だから西遊記を読むと、孫悟空がトイレのことを“五穀循環の場”と言っている場面がある。何とも言い得て妙。そしてブタと同じく雑食性であるイヌもまた飢えた状況では人の排泄物を得ようと狙っている。蒙古地方に旅した人が用を足そうと野外の草原に行くと、それと察した飢えたイヌが後を付けていく記述を呼んだことがある。そして中国ではイヌも食用にしている。2, 3年前にも、ペットブームで増えすぎたイヌを食肉用に運んでいるシーンが中国のテレビで放映されていた。これも食物連鎖の一例なのである。

だから平素肉や魚を食べていながら特定の動物に対し妙に思い入れたっぷりに動物愛護を説く人は、やや偏った見方の持ち主といえるかもしれない。いわんや、クジラの保護のためなら世界のどこにでも出かける運動家も、クールな目で見ると、動物の生命に対しての不平等感覚とも見えてしまうのである。ウシやブタ、ニワトリを食べていてクジラは絶対いけない、クジラの餌となるオキアミなどは食われて当然、とするのも考えてみれば変な論理だ。絶滅を防ぐための行為としてはそれなりに理解できるが、それぞれの民族の文化、歴史の背景が発想の違いになっているとしか言いようがない。

ともあれ動物の中の一つである人類は、いわゆる動物はもちろん魚さえも家畜化し繁殖させる知恵を身につけた。そして命を奪うことにより食料化してきた。こうして人類がその数を増大させ、地球上の生態バランスを崩しかねぬまでになり、それと併行して人間以外の“生命”に対して真剣に向き合わなくなったことは問題であるにしても、現実には直接手を下すか下さぬかの違いはあって

も、われわれは生命を奪って生かされていることには違いがないのである。

それに、ブタは現実に非常に怜悯であり、人間に近い感情・感覚の持ち主であって、音楽にも反応するなど他の動物には見られぬほど高度に発達した知能と感受性を持ち合わせているだけに、不幸なことにその肉がおいしすぎるが故にその生命をいただく、われわれの食料とさせてもらう時にはそれなりの引っかけが生じるのも無理はない、と思うのである。

話は飛ぶようだが、かなり以前に何かの本で京大の探検隊長と京都のお寺の尼さんの会話を讀んだことがある。探検のいろいろな話をする隊長に尼さんは「それはよかったなあ」と相槌を打つのである。そのうち野生のトナカイ……だったと思う……を殺して食べる話になった時も尼さんは「それはよかったなあ」とおっしゃる。そこで隊長は「私ら、殺して食べたんでっせ、それでも、よかったなあとおっしゃるので？」と問い直すと、「あんたら、おいしかったんやろ」「そりゃあ、おいしかったですよ」「それがよかったんや、おいしいと思うて食べはったら死んだ命が生きるんや、よかったんや」

これには隊長、絶句したという。ある意味では生きることの本質を「よかったなあ」で説き尽くしているとすら言える。何とも凄惨な説法をさりげなくする所に、この尼さんの本領がある。

禅僧の生活でも、食べ物を大切に扱う点では徹底している。まず食事の前には食を与えられることへの感謝のことは必ず口にする。そして茶碗に残ったものは最後にお湯を入れて指で、時には漬け物の一切れでお椀をこすりまくってきれいにし、その湯を飲み干す。この食物で自分は生かさ

れているとの思いを、日常の食事の場で無駄なく残さず感謝とともにいただく。他の宗教でも、食物は天から神から与えられたものとして位置づけ、神に食物を捧げる儀式が多く行われていて、ここにも動植物の生命を奪って自分の生命の糧にしているとの強烈な意識の表れがある。

植物の生命も……

ところで世の中には菜食主義の人がいる。動物の命を奪わない、それに身体のためにもよい、と信じての主義であり、そのことに決して反対するつもりはない。だが、だからといって、植物という名の生命を奪っていることには間違いない。

いや、生け花だって、花という名の植物にとっての何より貴重な生殖器官を、人の目を楽しませるという欲望のために手折り、その細胞を死に至らしめる行為であると言える。それに筆者もよくやる草むしり、雑草とはいえどもそれなりの生命なのだ。これを平然と奪っている。見た目をよくするだけのために……。げに人類とは勝手な生き物、罪深い生き物というほかはない。

ここで反論が出るかもしれぬ。動物と植物は違う、動物には知能が、感情があり、植物にはそれがない。その植物にそこまで気を遣うのは少し異様ではないか……。

たしかに動物と比べると植物の構造、細胞は単純に見える。だが気温や土の水分によって発芽や開花の時期を調節する。成育条件が悪く、厳しいとなると早々に結実して次世代を残し、種子の形、つまり悪環境に耐える形態で苦境を乗り切る。逆に好環境では枝葉を伸ばしてできるだけ多くの子実を残そうとする。この知恵は遺伝子の働き、にしてもかなりのものである。花や蜜、香りで虫を

誘って受粉させる。忌地といって同じ地に連続して植えると成育がよくない現象も同じ種の生命を遠く広く拡めるための知恵だし、他の植物を寄せ付けぬ物質を発散するアレロパシー現象も見られる。動物に食われぬための棘やイバラの形態もとる。20メートル以上の梢のてっぺんにまで水を供給する。いや、脳細胞が、神経細胞が存在しない、との言葉が出るかもしれぬ。たしかに動物に見られるのと同じ細胞はない。

だが、植物に炎を近づけ焦がすと、葉は縮む。このとき悲鳴としか言いようのない電位の変動を発信しているのを見出し、研究している人がいるのだ。

農水省では土中の水分の減少による植物のストレスをAEセンサーを利用して音波で解読する試みがなされているし、早大理工学部には情動的な存在としての植物といった視点から、植物の生命感覚を葉の表面の電位変化によって樹木群の情報ネットワークを研究している教授もいらっしやる。

すでに知られることでは、毛虫に食われたカエデやハンの木の葉を餌にして同じ種類の毛虫を飼うと毛虫の成育が遅れる。なぜかという、葉の成分の内容を毛虫が嫌がるかあるいは栄養価の低い成分に変質させるからだ。しかも被害を受けた木に隣接する、被害を受けていない木にも同じ現象が起こる。被害木が、攻撃を受けているとの警告物質を空中に発散し、仲間の木に防御体制をとらせるのである。また白樺をマイマイガが食べた時にストレスを起こした木は青葉アルコールの香りを放出し、これを感じた他の白樺はマイマイガの嫌うフェノール類が増加する。青葉アルコールにはポプラやミズナラでも感応する。また植物に音楽を聴かせる試みもなされている。身近な例で

はオジギソウは触れればしぼむし、中国の昆明で開かれた世界園芸博覧会に出品された“舞草”は女性の高い声に反応して葉と枝が動くという。

このような例が多い所を見ても、植物にもそれなりの情報伝達機能と、それを受けて対策を整える意志が存在することがわかる。

となると、動物は高級、植物は意志がないから食べようが折ろうが構わぬ、とするのは人間のあさはかな(?)思い上がりに過ぎぬのではないか、とも思えてくる。少なくとも菜食主義者は生き物や地球にやさしい行為とは言い切れなくなる。物言わぬが故に、少なくとも人間の耳に聞こえぬが故に、植物を傷つけ生命を奪っても構わないとの論理は成立し得ない、と言えるのではないか。

最後に……

筆者の悪い癖で、話題は少し拡散してしまった。とは言うものの、“食”という行為は、自然の食物連鎖の中で生き物の生命を奪うこと、そこから逃れ得ぬことについて改めて考え直してみた。

“食”にはたしかに快樂の要素がある。しかし、そこにはあくまで提供された素材の生命を最大限に生かし、無駄なく、おいしく、感謝の念を持ってわれわれの身に役立てる行為であると考えてみたかったのである。

これは、切り花を愛でる心、花を眺める一瞬を心ゆくまで楽しみ、味わおうとする心にも共通す

るものであると言ってもよいのではないか。そこには、生かし生かされる生命のよき関係が存在するものと信じたい。

それにしても、飽食といわれる世相、この地球上には飢えに苦しむ人が多くいるというのに、食べ物が無駄にする、こんなのでいらないと平気で捨て去る、歩きながら食べる。かと思うとテレビでの早食い競争や卵やパイのぶつけ合いを面白がってやるシーンは見るに耐えないものがある。

その一方で左翼系の強い学校では給食の時、食事の前の「いただきます」は宗教にかかわるとして唱えさせない所がある。食への感謝、つまり素材の生命に、そして加工し調理してくれた方々へのありがとうとの素朴な気持ちすらあえて否定する、否定させよう、との発想に何やらうそ寒いものを感じてしまうのは果たして筆者だけであろうか。

世の中の便利さ、安全さに慣れ、いや狎れきって“生きる”ことへの本質、原点から目をそらし、生命を維持するための“食”を、与えられて当然、無駄にして平気、というのは人類の築きあげた文明の退廃の最も恐るべき部分かもしれない。

ともあれ SPF 豚協会の記念フォーラムでのひと言、問題提起は、筆者に改めて食の本質にせまる一断面についての思索の、そして反省のよい機会を与えてくださったものと感謝している次第である。